# 市川団蔵歴代の墓

［登録年月日］平成一九年三月一五日
［種別］史跡（墓・碑）
［名称］市川団蔵歴代の墓
［点数］一基
［所有者等］法照寺
［所在地等］永福一―六―一一

# 市川団蔵歴代の墓

市川団蔵家は屋号を三河屋といい、団十郎の門葉では最も古く重い家柄である。

墓碑には、正面と両側面に初代から五代までの市川団蔵や、初代団三郎、三代・五代・五代の次の団之助など団蔵の家族ら二八名の法名が刻まれ、正面に丸に三引の紋、台座には三升の紋、左側面に一句が刻まれている。

初代（円充浮誓信士）は、初代団十郎に入門し団之助を名乗り、元禄一一年（一六九八）団蔵と改名し、荒事・敵役として活躍した。二代（浄鑑）は父の跡を継いですぐに亡くなり、三代（円珠院鑑西）は主に上方で活躍した。墓碑では三代団蔵命日の法名が「円珠浮鑑信士」となっており、二代と三代が組み合わさった法名となっている。四代（円頓了西信士）は、面明（舞台上の役者の顔を照らす長い柄の付いた燭台）を初めて使用したといわれる。五代（了団信士）は写実的な地味な芸風で「渋団」と呼ばれた。

左側面の句「周の春はきのふなりけり冬至梅」は、四代団蔵の次男三代団之助（智幻西順信士）の辞世の句である。若女形として活躍したが、文化一四年（一八一七）一一月二日、借財と病苦により自殺した。周の春とは周（中国）の時代の正月のことで、周の時代には一一月を正月としたので、一一月一日のことをさした。そして、江戸時代には歌舞伎の顔見世興行が一一月一日に行われたため、歌舞伎を知る者には馴染み深い語句であった。この句では、その周の春が昨日と詠まれており、まさに三代団之助の命日を表している。

法照寺は、明暦の大火に遇い、寛文元年（一六六一）以来本願寺とともに築地（中央区）にあった。大正一二年（一九二三）の関東大震災に遇い、昭和三年（一九二八）区画整理により現在の杉並の地に移転した。この寺の墓石の中でも、江戸歌舞伎の名門初代市川団蔵をはじめ歴代の墓碑は文化財として貴重なものである。

【文化財所在地】